

人間の利己性 倫理学

1

利己主義・ 人間の利己性の問題

- 利己主義は極端に言うとも自分さえ良ければ他はどうなってもよいということですか？」
- 「思考の大半が利己的は発想だったことに衝撃を受けた。道徳的な思考ってかなり難しいのでは」

「誰も傷つかない」

- フランクリンの方法：賛否の理由を書き出して、その重みづけを考える。
- 「あとではばれるかもしれない」「後悔するかもしれないから」などの理由は自分の利益を考えている。
- けっきょくわれわれは自分の利益を正しく考えればいいのか？自分の利益以外の理由はどれくらい大事なのだろうか。

- 「ボランティアとか、進学や就活のためにするのならただの利己心からのもの？」
- 「募金も自己満足？」

- なにかをするときに、他人の利益や都合をどのていど考えるべきか？
- そもそも他人の利益を考えて行動することはできるのか？ みなそんなことしているだろうか？

- 「鉛筆くらい、会社から何十本だってもって帰れるのを知ってるだろう？」

我々は偽善者？

- 8才のジミーが、学校の先生から手紙をもらってきた。「ジミーは隣の生徒から、鉛筆を1本盗みました。」父はカンカンに怒った。ジミーにこんこんと説教し、自分がどんなに驚き、がっかりしたかを話して聞かせ、二週間の外出禁止を申しわたした。「母さんが帰ってきたらどうなるか！」とおどした。父は最後にこう結んだ。「それにジミー、鉛筆がほしいなら、そういうばいいじゃないか。なぜ父さんに頼まない？」

弱者の道徳

- プラトン『ゴルギアス』での登場人物カリクレス
- 自分の利益と快樂こそが求めるべきもの。道徳を気にする人々は、自分が弱いために強い人に嫉妬している。自分が他人より多く取れないものだから、他人が不正に多く取ろうとすることを非難するのだ！

ギュゲスの指輪 (プラトン『国家』から)

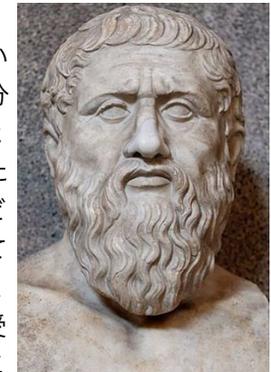
- ギュゲスは、羊飼いとして当時のリュディア王に仕えていましたが、ある日のこと、大雨が降り地震が起こって、大地の一部が裂け、羊たちに草を食わせていたあたりに、ぽっかりと穴が空きました。彼はこれを見て驚き、その穴の中に入って行きました。物語によれば、彼はそこにいろいろと不思議なものがあるのを見つけましたが、なかでも特に目についたのは、青銅でできた馬でした。



- これは、中が空洞になっていて、小さな窓がついていました。身をかがめてその窓からのぞきこんで見ると中には、人並み以上の大きさの、屍体らしきものがあるのが見えました。それは、他にはなにも身に着けていませんでしたが、ただ指に黄金の指輪をはめていたので彼はその指輪を抜き取って、穴の外に出たのです。



- さて、羊飼いたちの恒例の集まりがあったことです。それは毎月羊たちの様子を王に報告するために行なわれるものですが、その集まりにギュゲスも例の指輪をはめて出席しました。彼は他の羊飼いたちといっしょに座っていましたが、そのときふと、指輪の玉受けを自分の方に、手の内側へ回してみたのです。するとたちまち彼の姿は、かたわらに座っていた人たちの目に見えなくなって、彼らはギュゲスがどこかへ行ってしまったかのように、彼について話し合っているではありませんか。彼はびっくりして、もう一度指にさわりながら、その玉受けを外側へ回してみました。回してみると、こんどは彼の姿が見えるようになったのです。

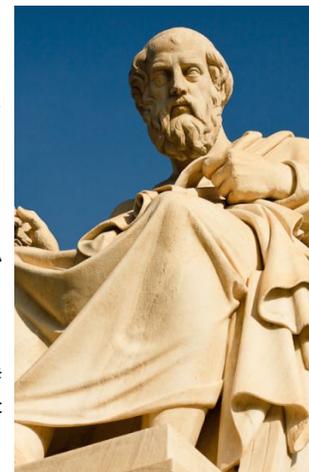


- このことに気づいた彼は、その指輪が本当にそういう力を持っているかどうかを試してみました。結果は同じこと、玉受けを回して内側へ向ければ、姿が見えなくなるし、外側へ向けると、見えるようになるのです。



- ギュゲスはこれを知ると、さっそく、王のもとへ報告に行く使者のひとりに自分が加わるように取り計らい、そこへ行って、まず王の妃と通じたのち、妃と共謀して王を襲い、殺してしまいました。そしてこのようにして、王権をわがものとしたのです。

- さて、かりにこのような指輪が二つあったとして、それでもなお正義のうちにとどまって、あくまで他人の物に手をつけずに控えているほど、鋼鉄のように志操堅固な者など、ひとりもいまいと思われましよう。市場からなんでも好きなものを、何をおそれることもなく取ってくることもできるし、これと思う人々を殺したり、いましめから解放したりすることもできるし、その他何ごとにつけても、人間たちのなかで神さまのように振る舞えるというのに！——こういう行為にかけては、正しい人のすることは、不正な人のすることと何ら異なるところがなく、両者とも同じ事柄へ赴くことでしょう。



- ひとは言うでしょう、このことは、何びとも自発的に正しい人間である者はなく、強制されてやむをえずそうなっているのだということの、動かぬ証拠ではないか。つまり、〈正義〉とは当人にとって個人的には善いものではない、と考えられているのだ。げんに誰しも、自分が不正を働くことができると思った場合には、きっと不正をはたらくのだから、と。これすなわち、すべての人間は、〈不正〉のほうが個人的には〈正義〉よりもずっと得になると考えているからにほかならないが、この考えは正しいのだと、この説の提唱者は主張するわけです。

- 事実、もし誰かが先のようななんでもしたい放題の自由を掌中に収めていながら、何ひとつ悪事をなす気にならず、他人のものに手を付けることもしないとしたら、そこに気づいている人たちから彼は、世にもあわれなやつ、大ばか者と思われることでしょう。ただそういう人たちは、お互いの面前では彼のことを賞賛するでしょうが、それは、自分が不正をはたかれるのがこわさに、お互いを欺き合っているだけなのです。

プラトン『ゴルギアス』でのソフィスト

- ぼくは思うのだが、法律の制定者というのは、力の弱い者たち、つまり世の大多数をしめる人間たちなのだ。だから彼らは、自分たちのこと、自分たちの利益のことを考えにおいて法律を制定しているのだ。そして、それにもとづいて称賛したり、非難したりしているのだ。



13

プラトン『ゴルギアス』でのソフィスト

- つまり彼らは、人間たちのなかでもより力の強いひとたち、そしてより多く持つ能力のある人たちを脅して、自分たちよりも多く持つことができないようにするために、余計に取ることは醜いことで、不正なことだと言い、また不正をおこなうとは、そのこと、つまり他のひとよりも多く持とうと努めることだと言っているのだ。というのも、彼らは自分たちが劣っているものだから、平等に持ちさえすればそれで満足するからなのだ。(プラトン『ゴルギアス』)

14

- 「人は、正しい生き方をするためには、自分自身の欲望を抑制するようなことはしないで、これを最大限に許してやり、そして、勇気と思慮をもってその最大限にのばしたもろもろの欲望に十分奉仕し、欲望の求めるものがあれば何でも、そのときそのときに、これを充足させてやるだけの力をもたなければならぬ。」



- 「しかしながら、けだしこのようなことは、とても世の大衆のないうところではない。そこで、彼ら大衆は、それにひけ目を感じるがゆえに、こうした能力のある人たちに非難の矢を向けるのであるが、これも、つまりは、おのれの無能力をおおい隠そうという魂胆にほかならぬ。」

- 「そして口を開けば、放埒は醜いことだと主張して、さきの話のなかでわたしが言った生まれつきすぐれた素質をもつ人たちを抑えつけ隷化しようとするわけだ。そしてまた、自分たちは快樂に満足を与えることができないものだから、しきりと「節制」や「正義」を誉めたたえるけれども、それは要するに、自分たち自身に意気地がないからなのだ。」



- 「いや、ソクラテス、あなたは眞実を追求していると称しているが、よろしい、それなら、そのありのままの眞実とはこうなのだ。すなわち、傲りと、放埒と、自由とが、ひとたびそれを裏づける力を獲得するとき、それこそが人間の徳というものであって、それ以外の、あのお上品ぶったいろいろの飾り、自然に反した人間のあいだの約束ごとなどは、馬鹿げたたわごとにとすぎず、なんの価値もないものだ。」



プラトンの『ゴルギアス』 でのカリクレスの演説

「人は、正しい生き方をするためには、自分自身の欲望を抑制するようなことはしないで、これを最大限に許してやり、そして、勇気と思慮をもってその最大限にのぼしたもろもろの欲望にじゅうぶん奉仕し、欲望の求めるものがあれば何でも、そのときそのときに、これを充足させてやるだけの力をもたなければならぬ。」



しかしながら、けだしこのようなことは、とても世の大衆のないうところではない。そこで、彼ら大衆は、それにひけ目を感じるがゆえに、こうした能力のある人たちに非難の矢を向けるのであるが、これも、つまりは、おのれの無能力をおおい隠そうという魂胆にほかならぬ。」



「いや、ソクラテス、あなたは真実を追求していると称しているが、よろしい、それなら、そのありのままの真実とはこうなのだ。すなわち、傲りと、放埒と、自由とが、ひとたびそれを裏づける力を獲得するとき、それこそが人間の徳というものであって、それ以外の、あのお上品ぶったいろいろの飾り、自然に反した人間のあいだの約束ごとなどは、馬鹿げたたわごとにならず、なんの価値もないものだ。」



「そして口を開けば、放埒は醜いことだと主張して、さきの話のなかでわたしが言った生まれつきすぐれた素質をもつ人たちを抑えつけ奴隷化しようとするわけだ。そしてまた、自分たちは快樂に満足を与えることができないものだから、しきりと「節制」や「正義」を誉めたたえるけれども、それは要するに、自分たち自身に意気地がないからなのだ。」



- 実はみんな自分の利益だけを考えたのだが、それができないので、自分の利益だけを考えているひとを叩こうとする



- 私たちは自分の幸福と快樂（のみ）を求めべきか、という問題の前に、そもそも私たちは自分の幸福（と快樂）以外のものを求めることができるのか、という問題がある
- 私たちが自分の幸福・満足以外のものを求められないのならば求める「べき」だとかもとめる「べき」でないということには意味がない

心理学的利己主義

- 人間心理に関する事実としての理論
- 人間はみな自分の利益しか求めないようになっている。やることなすこと、すべて自分の利益のためなのだ。それ以外のことは考えられない
- → だから人々に利他的にふるまうように期待しても無駄だ
- → 報酬や罰によって動かすしかない

4

反論

- 一見して自明な反例はたくさんあるように見える
- 自己利益に反する行動
 - テスト前にマンガを読む
 - ダイエットしたいのにケーキを食べる

5

- あきらかに善意の行為
 - （犠牲に対する見返りが小さい）
 - 献血
 - 募金
 - 福祉ボランティア
 - 道やキャンパスに落ちてるゴミを拾う

仮面の下

- 我々はみな仮面をかぶって生活をしている、という発想
- 利他的な行為の裏には利己的な動機があるのではないか？
 - 名誉欲
 - 宗教的信念
 - 無意識
 - 自己欺瞞

32

荀子の「性悪」



10

荀子

人の性は悪にして、其の善なる者は偽なり。今、人の性は、生まれながらにして利を好む有り。是に順う、故に争奪の生じて辞讓は亡ぶ。生まれながらにして疾悪有り。是に順う、故に残賊の生じて忠信は亡ぶ。生まれながらにして耳目の欲有り、声色を好む有り。是に順う、故に淫乱の生じて礼義文理は亡ぶ。然らば則ち人の性に従い、人の情に順えば、必ず争奪に出で、犯文乱理に合して、暴に帰す。故に必ず將に師法の化、礼義の道有り、然る後に辞讓に出で、文理に合して、治に帰さん。此れを用て之を觀れば、然らば則ち人の性の悪なるは明らかならん。其の善なる者は偽なり。

11

- 人間の本性は悪であって、善になるのは偽によるものである。さて考えてみるに、人間の本性には生まれつき利益を追求する傾向がある。これにしたがえば、他人と争い奪い合うことになって、おたがいに譲り合うことがなくなるのである。また、人間には生まれつき妬んだり憎んだりする傾向がある。これにしたがえば、傷害沙汰をおこすようになって、あたがいに誠を尽くして信頼しあうことがなくなるのである。また、人間には生まれつき耳や目が美しい声や美しい色彩を聞いたり見たりしたがる傾向がある。この傾向のままに行動すると、節度を越して放縦になり、礼義の形式や道理をないがしろにするようになるのである。

12

孟子



6

孟子の「惻隱の情」

孟子曰はく、「人皆人に忍びざるの心有り。今、人乍ち孺子の将に井に入らんとするを見れば、皆怵惕惻隱の心有り。交はりを孺子の父母に内るる所以に非ざるなり。誉れを郷党朋友に要むる所以に非ざるなり。其の声を悪みて然するに非ざるなり。」

7

孟子が云った。人には誰しも、忍びざるの心というものがある。この忍びざるの心というのは、幼児が井戸に入らんとするのを見れば、心配して気遣い、惻隱の心が自然と生じるようなものである。これが生じるのは、その幼児の父母と交わりを結びたいが為ではない、救って名誉を得るためにするわけでもない、救わぬことで不評を買うことを恐れたわけでもない、単に人の心に自然として来たるものなのである。

8

- 聖徳太子「我必ず聖に非ず。彼必ず愚かに非ず。共に是れ凡夫ならくのみ」（私が聖者であるわけではない。彼が愚かであるわけではない。お互いに凡夫でしかないのである）
- 親鸞聖人「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと、...
- 親鸞聖人「悪性さらにやめがたし。こころは蛇蝎のごとくなり。修善も雑毒なるゆゑに虚仮の行とぞなづけたる」悪い本性はなかなか変わらないのであり、それはあたかも蛇やさそりのようである。だからたとえどんなよい行いをして、煩惱の毒がまじっているので、いつわりの行というものである。



マルティン・ルター(1483-1546)

ルターは、「ユダヤ人もギリシア人も、ことごとく罪の下にあることを、わたしたちはすでに指摘した」（ローマ人への手紙 3:9）の箇所を、つぎのように述べている。人びとの目から見て悪人である人だけでなく、善き人であるように見える人も、すべての神の前では罪の下にある。その理由は、公然たる悪人は、人びとの目からみてさえ義と思われないから当然である。



16

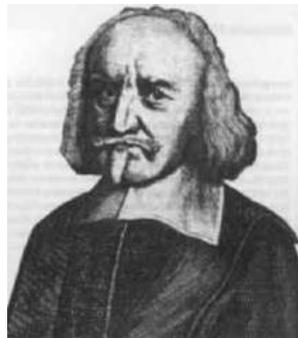
ルター

しかし外面的にただしく見える人もその心のなかでは罪をおかしている。というのは、たとえ人が外見的によい行ないをしたとしても、それは罰へのおそれから、利益とか名誉などを欲して行なっているのであって、けっして自発的に喜んで行なっているのではないからである。つまり外見的にただしく見える人は絶えずよい行ないをなすけれども、その心のなかには悪いものへの「むさぼりの心」と熱望とがみちているのである、と。

17

ホッブズ

- トマス・ホッブズ(1588-1679)
- 「他人の災難に対する「悲しみ」は「憐れみ」である。これは同じ災難が自分にふりかかるかもしれないという想像から生まれる」



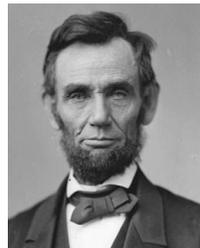
- 「人間にとって、その力に関するもので、自分自身の欲望を達成することができるのみならず、欲望をもった他者を自分が支援することもできる、ということ以上に偉大な議論はありえない。そしてこれこそ、慈愛（チャリティ）が存在するところの概念なのである」

- ロンドンを散歩していたホップズは、道端の物乞いに施しを与えた。一緒に歩いていた友人がすぐさま、言行が一致していないと責めた。するとホップズは、物乞いを喜ばせることで自分がいい気分になったのだから、施しは利己的なのだと答えた

リンカーン

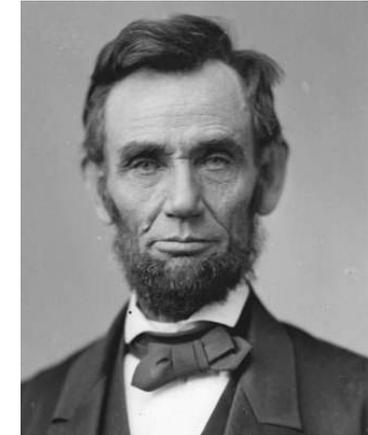
- エイブラハム・リンカーン (1809-1865)。米国第16代大統領。

- かつてリンカーンは、泥道に行くオンボロ馬車のなかで、連れの乗客に向かって、すべてのひとは利己心にうながされて善いことをするのだと語った。ぬかるみに渡された橋を越えながら、連れの乗客たちはこの立場に反対した。



リンカーン

- エイブラハム・リンカーン (1809-1865)。
- 米国第16代大統領。



リンカーン

- その橋を渡ると、老いた半野生のメス豚が堤防の上でものすごい鳴き声をたてていた。その豚の子どもたちが沼にはまり、溺れていたのである。そのオンボロ馬車は丘を登りはじめたところだった。リンカーンは「悪いがちょっと止めてくれ」と馭者に大声で知らせた。リンカーンは飛び降りると、もと来た方へ走り、子豚たちを泥沼から引き上げ、堤防の上に連れていった。

リンカーン

- 彼が戻ると、彼の仲間は「おやおや、するとこの場合、君の利己心はどういうことになるんだい？」とたずねた。「どういことだい？これまたお人好しの皆さんだ。これこそまさに利己心の本質なんだよ。もし私たちがここをこのまま通り過ぎて、かわいそうな老いた雌豚が子豚たちを心配しているのを放ったらかしにしてしまったとしてごらんよ。一日中、心の平和なんかなかっただろう。私は、私の心の平和のためにやったんだよ。わからないのかい？」

30

含意

- けっきょく誰もが自分の利益を求めて行動している
- 世の中に「本当に正しい」ものなどはない。そうしたことを主張するのは偽善
- 「善意の行為」などはすべて偽善でたいした価値はない
- 「善意の人」を褒めたたえる必要はないし、善行しないことについて罪悪感を抱く必要もない

31

サルトルの「自己欺瞞」

- サルトル(1905-1980)。
- 愛人の哲学者・フェミニストのボーヴォワールも有名。



36

サルトルの自己欺瞞

- たとえば、ここにはじめてのデートにやってきた女がいるとしよう。彼女は、自分に話しかけているこの男が自分に関してどんな意図をいだいているかを十分に知っている。彼女はまた、早晚、決断しなければならないときが来ることも知っている。けれども彼女は、それをさし迫ったことだとは感じたくない。彼女はただ相手の態度が示す丁寧で慎しみぶかい点だけに執着する。.....彼女は、彼が話しかけることばのなかに、その表面的な意味以上のものを読みとろうとしない。「僕はあなたをこんなにも賛美しています」と言われた場合、彼女はこのことばからその性的な下心を取り去る。

37

- 。 . . . 彼女は自分が相手に催させる欲情に対してきわめて敏感である。しかし露骨で赤裸々な欲情は、彼女を辱め、彼女に嫌悪をいだかせるであろう。 . . . いまここで、相手の男が彼女の手を握ったとしよう。相手のこの行為は、即座の決断をうながすことによって、状況を一変させるかもしれない。この手を握られたままにしておくと、自分から浮気に同意することになるし、抜きさしならぬはめになる。さりとて、手を引っこめることは、このひとときの魅惑をなしているこのおぼろげで不安定な調和を破ることである。娘は手をそのままにしておく。けれども、彼女は自分が手をそのままにしていることには気づかない。

38

記憶はあてにならない



- 「自己奉仕バイアス」：ものごとをすべて自分に有利なように考える
- ジュリア・ショウ (2016) 『脳はなぜ都合よく記憶するのか』、講談社
- 自分に都合がわるい出来事はわすれやすい。記憶を書き換えることもしばしば
- eg. 「家事戦争」調査。自分のした家事はおぼえているがパートナーのものは思い出せない

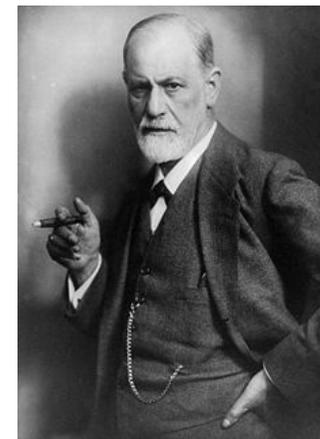
心理学的利己主義の魅力

- すべての行動を利己心という動機によって説明するという単純さには魅力がある。多くの場合我々が利己的な動機によって行動していることはおそらく事実
- 他人の行動は利己的に解釈した法が腑に落ちることが多い。他人の「善意」を無批判に信用することは危険
- 「自分を知る」ことの難しさ。利己的解釈は「深く」わかってるようでかっこいい。ニヒル

39

フロイト

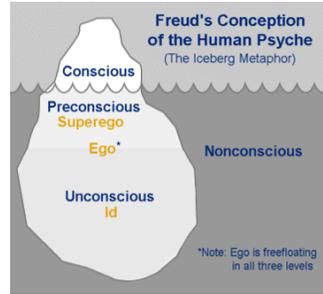
- ジークムント・フロイト (1856-1939)。
- 「無意識」を発見。
- 意識されないリビドー (性衝動) が人々を動かしている。



33

快楽原則

- 私たちの精神活動はすべて、快感を求め、不快を避ける方向に向いていて、その活動は自動的に快楽原則によって調整されているらしい。・・・性本能は、その発達のはじまりからおしまいで、快感獲得をめざしていることはあきらかだ。



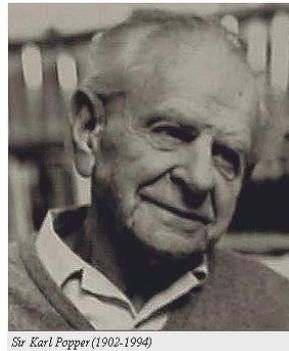
34

精神分析

- 精神分析。「彼は自分では～だと思っているが、実は～を求めているのだ」
- エディプス・コンプレックス説：実は男性はみな父を殺し母親とセックスしたいと思っているのだ

心理学的利己主義は科学的でない？

- カール・ポパー (1902-1994)。
- 「反証可能性」
- 科学といえるのは、その主張（命題）が反証する方法が示されているときのみ
- フロイトの理論は反証できない。→ 科学ではない



40

科学とは

- すべての科学理論は仮説。すべての科学的真理はまだ反証されていない仮説にすぎない。
- よい科学理論とは、高い反証可能性をもつ理論。反証の方法がないものは疑似科学。
- マルクスやフロイトの理論は、どのような条件でなければ偽であると示すことができるか明らかでない。
- → 多くの「仮面剥ぎ」「本当は～なのだ」は反証できない → 信頼できない「お話」。

41

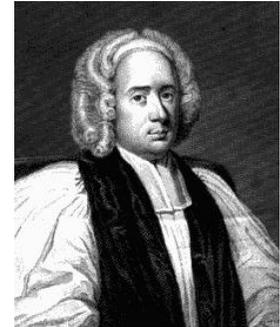
快樂と動機

- われわれは本当に自分の利益や快樂を求めて行動しているのだろうか。

42

自己愛と欲求

- ジョセフ・バトラー(Joseph Butler, 1692-1752)
- たしかに、我々はまず自分自身の幸福を気づかっている、ということは正しい。人間は自己愛 self-loveに動かされている

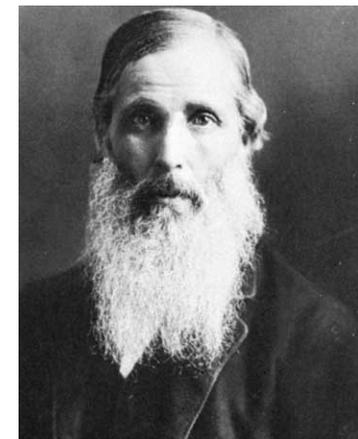


- しかし、単に自分の利益、性欲の満足、食欲の満足などだけを求めているわけではない
- 我々が直接欲求することには、他人の幸福を実現すること、正しく生きることなども含まれる
- 自己愛は、自分のさまざまな欲求・欲望が満たされることを望む、間接的・二階の欲求（二階の欲求=自分の欲求についての欲求、おそらく人間=人に特有の欲求）
- 我々が自分自身の欲求が満たされることを望むからといって、それらの欲求が狭い意味で自己利益のみにかかわるとはいえないし、自分が望むこと（友達の幸福、差別の根絶、etc）を実現するという意味での自己愛を發揮することになにも悪徳はない



シジウィック

- ヘンリー・シジウィック(1838-1900)
- 動機と快樂は区別しなければならない



43

シジウィック

- 時に、次のように言われることがある。われわれの現在の成熟した意識はどうあれ、原初的な衝動はすべて快へ向かい苦痛を避けるように方向づけられており、それ以外に向けられた衝動は「観念連合」（連想、条件づけ）によってこの原初的な衝動から派生したものである、と。わたしはこれを証明すると思われる証拠はなにひとつ知らない。

44

シジウィック

- 子供達の意識を観察する限りは、快への欲求と快以外のものにかかわる衝動の二つの要素は、成人の生活と同じように両立しているように見える。なんらかの違いがあるとすれば、それは上の主張とはむしろ反対の方向にあるように思われる。つまり、子供たちの行為は、より本能的で反省されていないので、快を意識的に目指すより、より快以外のものにかかわる衝動によってうながされている。

45

シジウィック

- たしかに、この二種類の衝動は意識の発達をさかのぼるにつれて次第に区別できなくなる。しかしこのことから、その二つの衝動のどちらかと、双方がそこから発達してきたはっきしない衝動と同一視してよいことにならないのは明らかである。

46

シジウィック

- わたしが主張しようとしているのは、人々は今ふつうは快だけを欲求するわけではなく、かなりの程度は他のものも欲求するということである。とりわけ、あるひとびとは徳への衝動を持っており、これは自分自身の快への意識的欲求と葛藤しかならず、また実際に葛藤している。

47

快樂と動機

- 人々は明らかに快樂以外のものを求めて行動している。むしろ快を期待して行動することは少ないとさえ言える
- 動機が達成されると満足感や快樂(達成の快)を得ることができるが多い
- しかしこれは「はじめから快樂を求めていた」ということとは別
- 人に親切にするときは人を助けようと思っているのであって、助けた快樂を得ることを動機としているのではない

48

リンカーン再訪

- リンカーンのエピソードは心あたたまる話
- 豚に対する共感能力。豚を見捨てた場合に感じる強い罪悪感
- 馬車を止めてわざわざ助けに行く決断力と行動力
- 実際にリンカーンはこのエピソードによって（少なくとも政治家として）利益を得たが、同時に豚と人々(と自分自身)をより幸福にした

49

結論

- おそらく人間が利己的な傾向をもつことは否定できない。基本的には利己的に行動していると見るのは実践的には重要
- しかし常に自分の利益だけを考えて行動しているとは言えない。徳や他人の幸福はそれ自体を目的として求められうる
- 利他的な行為の結果快や満足を得られるのは望ましいこと。利己的な傾向性の満足と人々の幸福を調和させることができることが望ましい

50

結論

- もし正しい行為や善行によってわれわれが快感や満足を感じるとしても、それを嫌悪したり卑下したりする必要はない
- (慈善的行為をするさいには楽しさや利益を得てはいけな~~い~~と考える必要はない)
- 善行や利他的行動によって快を感じるこそ、自分が善人であることの印であるかもしれず、むしろ誇るべきであるかも

51

参考図書

- J. レイチェルズ (2003) 『現実を見つめる道徳哲学』、晃洋書房
- パオロ・マツァリーノ (2014) 『偽善のすすめ』、河出書房新社
- ロバート・クルツバン (2014) 『だれもが偽善者になる本当の理由』、柏書房
- ダン・アリエリー (2012) 『ずる：嘘とごまかしの行動経済学』、早川書房
- セス・スティーヴンズ=ダヴィッドウィッツ (2018) 『誰もが嘘をついている：ビッグデータ分析が暴く人間のヤバイ本性』、光文社